

砂防・災害地視察記録としての「河井弥八日記」

内藤 一成¹

¹非会員 宮内庁書陵部（〒181-0004 三鷹市新川6-38-2-204）

E-mail: dai3204@beige.plala.or.jp

本稿は、参議院議長、日本砂防協会副会長であった河井弥八の日記にもとづき砂防や災害地の状況を紹介することにより、災害史に新しい視角を提供しようとするものである。河井は戦前から砂防の重要性を主張しており、河井の日記には、彼がみた災害地の状況が記録されている。本稿では、特に1950年代半ばの河井の視察記事に焦点を当て、中でも1953年の「紀州大水害」について取り上げる。

Key Words : *Kawai Yahachi Diary, control of soil erosion, Dr. Akagi Masao, Great Kishu Flood(Nanki-Suigai)*

1 はじめに

河井弥八（1877～1960）は生涯にわたり膨大な日記を残しているが、今回は、このなかから戦後間もない昭和20年代の各地の砂防状況や、災害地を視察したときの記事を摘録し、本史料の災害研究における有効性について検討してみたい。河井については、これまでは大正15年（1926）～昭和7年（1932）の日記が『昭和初期の天皇と宮中』全6巻として刊行されるなど昭和天皇の側近としての活動に専ら関心が寄せられてきた。だが「河井弥八日記」（以下「河井日記」）にはそれ以外にも多くの未刊行日記があり、その多くは、現在は掛川市教育委員会で所蔵されている（一部は今も河井家の所蔵）。未公刊「河井日記」を用いた研究としては、河井の食糧増産運動に注目した前田寿紀『戦中・戦後甘藷増産史研究』（学文社、2006年）が挙げられ、筆者も『中央公論』2013年7月・8月号において「参議院議長河井弥八日記」と題して議長時代の日記の一部を紹介したことがある。

今回、筆者が注目するのは、河井の砂防事業との関わりである。河井は砂防の重要性をかねてから主張しており、第二次世界大戦が終わるとすぐに荒廃した国土の再建には砂防が重要であるとして、全国各地を視察し、帝国議会・国会などで意義を訴えた。日記には、戦後の荒廃した山林や、災害に対し無防備な河川の様子、さらに台風や豪雨によってもたらされた各地の被害状況が、現地さまざまな声とともに記されるなど多くの情報が収載されている。さらに興味深いのは河井の視察の大半は「砂防のパイオニア」赤木正雄が同行していることである。赤木に関する一次史料が必ずしも多くないなか、「河井日記」はその点でも注目に値する。

本稿では昭和20年代を分析の対象とする。その理由は、第一に、この時期が、昭和22年に内務省に治水調査会が設置され、さらに昭和28年の西日本一帯にわたる大水害を機として、同年10月には「長くその後の長期計画の基礎となった」（『日本砂防史』）とされる「治山治水基本対策要綱」が制定されるなど砂防史において重要な時期であるためである。第二に、砂防協会から国会にわたる河井・赤木コンビの積極的な活動が、戦後における砂防の普及、発展に重要な役割を果たしたと考えられるからである。

2 河井弥八の経歴

河井弥八は明治10年（1877）10月24日、静岡県上張村（現・掛川市）に豪農河井重蔵の長男として生まれた。父重蔵は改進黨系の政治家で静岡県会議員や衆議院議員などをつとめたことで知られる。河井は静岡中学校から第一高等学校を経て、東京帝国大学法科大学に進み、明治37年に卒業した。同年文官高等試験に合格し、文部属より佐賀県事務官となり、明治40年貴族院書記官となった。大正8年12月貴族院書記官長となり、15年7月には宮内省に転じ、内大臣秘書官長、昭和2年3月には侍従次長兼皇后宮大夫、5年3月には皇后宮大夫兼侍従次長となり、7年9月には帝室会計審査局長官に就任した。昭和11年9月には依願免本官となり、悠々自適となったのもつかの間、13年1月には貴族院議員に勅選された。貴族院議員としては食糧増産と砂防を熱心に訴えた。戦後、貴族院が廃止となり、参議院が置かれることになると静岡地方区から無所属で出馬し、当選後は緑風会の結成に尽力した。緑風会の重鎮として活躍し、

昭和 28 年 5 月には第 4 代参議院議長に当選した。昭和 31 年 4 月に議長を辞任し、同年 7 月に行われた参議院議員選挙で落選、その後は文化財保護委員会の委員長となり、亡くなるまでその地位にあった。このほか昭和 13 年には大日本報徳社副社長、同 20 年には社長に就任している。昭和 35 年 7 月 21 日死去。

3 河井弥八と砂防への取り組み

前節でみたとおり、河井の官僚としてのキャリアをみるかぎり砂防との縁は薄い。では何が彼を砂防に引きつけたのか、考えられる理由としては、まず郷里静岡の地理的要因で挙げられよう。天竜川・大井川・富士川をはじめとした大小さまざまな河川が流れ、急峻な山間部から台地、平野と広がる静岡県の地形は、砂防の必要性を実感させるのに充分であった。また地域の先覚者に二宮尊徳の報徳思想を信奉し、生涯を治山治水と植林に捧げた金原明善のような人物がいたことも、少なからぬ影響を与えたことであろう。さらに帝室会計審査局長官として、最も保全が行き届いているとされる帝室林野（御料林）を踏査した経験も大きい。掛川市委教育委員会所蔵「河井家文書」には、この時の記録として「東北巡察記」（昭和 9 年）、「南アルプス巡廻記」（昭和 10 年）、「木曾支局視察日記」（昭和 11 年）が残されている。これらは視察の際に携行したものであり、いずれも細かな字でびっしりと見聞が書き込まれている。

河井がこうした背景、経験をもとに砂防事業に本格的に関わることになったのは、貴族院議員に選出された後のことである。以後、彼は砂防を報徳思想の普及、食糧増産と並ぶライフワークと位置づけ積極的な活動を展開する。昭和 16 年には帝国治水砂防協会理事に就任し、翌年には全国治山治水砂防協会顧問となった。終戦後の昭和 21 年には治山治水議員連盟を結成し、その顧問に就任、翌年には全国治山治水砂防協会理事長となった。その後、議員引退後の昭和 32 年には同協会副会長に就任、亡くなるまでその地位にあった。この間、赤木正雄と親交を結び、砂防協会、貴族院、参議院ではコンビを組んで活動した。

4 河井弥八・赤木正雄による視察の概要

「河井日記」をもとに昭和 20 年代の砂防・災害地視察の状況をまとめたのが表 1 である。ただし静岡県内の視察はあまりにも多いので省略した。また静岡県以外の視察でも、他用の序で程度までは載せていない。

順にみていくと、昭和 20 年は戦争と終戦直後の混乱の極にあったせいも、視察は一件もない。翌 21 年 5 月下旬、河井は赤木とともに広島県・山口県に戦後最初の視察旅行に出かけた。当時、河井は 68 歳、食糧事情、交通状況とも劣悪な中での視察は体力的にかなりきつ

かったはずであるが、日記からは精力的な視察ぶりが窺える。例えば、広島県玖波町の「町長中野松一氏の案内を得て玖波川の荒廃地及下流の復旧工事を視察」した際には、「下流の施工を急ぎ上流崩壊地工事計画なきに驚く」（5 月 26 日）と上流の砂防対策を欠いたまま下流の工事のみが行われるという砂防に対する認識の欠落に驚き、山口県の姫田川視察時には「上流に一本の堰堤あり能く惨害を防止し得たるも其下方に設営せるものはセメントを欠きしを以て側面より破られて用を為さず土砂は進んで市街に堆積したり」（5 月 27 日）と、

表 1 昭和 20 年代の河井弥八の砂防・災害地視察

年	月日	視察地	赤木	備考
21	5. 22-29	広島・山口	○	
	10. 13-17	新潟（佐渡）	○	
23	12. 25-26	群馬	○	
24	3. 7-8	山梨	○	
	7. 23-30	山形	○	
25	8. 22-24	群馬	○	
	8. 25-28	岐阜	○	
26	5. 12-13	栃木	○	
	6. 19-20	栃木	○	
	6. 23-24	群馬	○	
	7. 15-22	青森	○	
	8. 12-16	秋田	○	
	8. 25-6	長崎		
27	12. 16-22	広島・山口	○	10月、ルース台風
	7. 26-27	神奈川	○	
	8. 3-20	鳥取・島根・長崎・佐賀	○	7月、大雨（中国～東海）
28	11. 15-21	福井・富山	○	
	1. 9-24	香川・愛媛・高知・徳島・滋賀	○	
	8. 13-25	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分	○	6月、大雨（九州～中国）
	9. 17	神奈川（箱根）	○	7月、早雲山地すべり
	10. 10-11	山梨	○	
	10. 16-22	和歌山・京都・大阪	○	7月、南紀豪雨 9月、台風13号（全国、特に近畿）
29	11. 24-27	愛知		
	3. 27-28	栃木	○	
	6. 20-28	滋賀・福井・富山	○	
	7. 19-24	新潟・長野	○	
	8. 2-6	岐阜	○	
	8. 9-13	和歌山	○	
	8. 28-9. 1	岩手	○	
	9. 16	埼玉	○	
	10. 14-16	長野（木曾）	○	
	10. 21-28	愛媛・大分・福岡	○	9月、台風12号、洞爺丸台風
	11. 8-13	只見川（新潟・福島）・秋田	○	
30	12. 25	東京（小河内）	○	
	12. 27	神奈川（玄倉溪）	○	
	2. 14-27	熊本・宮崎・鹿児島	○	
	4. 5-8	宮城	○	
	6. 11-12	群馬	○	
	7. 8-10	長野	○	
	8. 6-9	新潟	○	
	9. 3-12	北海道	○	
	10. 10-12	熊本・福岡・大分	○	

「河井弥八日記」（掛川市委教育委員会・河井家所蔵）、内閣府防災情報ページHPにある「表 過去の災害被害」（<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/1/pdf/sankoshiryo.pdf>）などをもとに作成。

注1 静岡県内の視察は省いた。

注2 日程の内には、直接砂防視察とは関係のないものもある。



ルース台風被害視察時の河井（左）と赤木（右）

砂防ダムの効果に意を強くしつつ、下流に作られたダムの欠陥を指摘し

花園村に入っている。

八時出発。Auto 三輪二台に分乗、花園村天然 dam に向ふ。約二里辻の茶屋にて下車し徒歩二里、花園村字北の谷天然ダムを視る。同所に近き民家に小憩し村有志より切実なる陳情を聴く。敢て激励せんと欲するも言辞なし。現場より引返すこと数町、路辺にて休憩し、携来れる弁当を喫す。此所にて dam まで一行を尋ね来れる隣村安諦村村長久保伊右衛門氏と別る。安諦村の被害は花園村のそれと相匹敵するか如く、今尚交通路開けず全村孤立の状況に在り、米は一斗の運賃六百円を要し、醤油一升百六十円、塩鯖百匁九十円にして、村民窮乏し購買力なしと云ふ（海南市民衆新聞社外山勝重氏談）。十二時半帰路に就く。

その後、河井は地元の好意で用意された駕籠に乗り、さらにオート三輪、バス、ケーブルカー、電車を乗り継ぎ、和歌山県伊都事務所に到着、伊都郡町村長、議長等との集会に臨み、郡町村会長の橋本町長小林正雄より郡内被害状況及び要望事項の説明を聴取した。紙幅の都合により、花園村関係のみを掲げる。

(4)花園村の災害は言語に絶するものあり。崩壊の宏大なる直高五六百米、幅七八百米のもの二三ヶ所。之に次くもの数ヶ所。以下大小数千百を算す。数十年を経たる杉檜の植栽美林も到处崩壊し、人家耕地は山腹に残存するものを見るのみ。渓谷は悉く崩落し、無限最大の土量は有田川水源の地の本支全川を埋没し、数十米乃至数米の深さに達せり。地表の変貌之に過ぎたるはなしと云ふへし。之か原因は(1)長雨に続く短時間の強雨、(2)地質の脆弱（風化せる古生層堆土深く岩盤なし）、(3)一部森林の強伐等に帰すへきも、更に他に別因の強大なりしものあらんかを思はしむ。強ひて思へは南海地震の潜在効果如何。(5)被害民の救済如何。役場は全潰、収入役以下七名殉職し未だ跡方もなし。又一切の帳簿記録もなし。食糧、衣服、住居等原始的需要を始めとし経済的需要に応せざるへからず。従来村民は森林関係、山葵植栽、棕櫚栽培等を行へりと云も、之か復興は容易に非ず。交通は予等の通過せる高野山に出づるの外なく、有田川下流よりの捷路たる県道の開通は当分困絶なり。県道の開設は通常交通の利便ある下流地方より始めて漸次上流山村へ及ぼすの例なるも、有田川の最上流に在りては、先づ高野山との道路を利用して花園村より着工すへきに非ざるか、而して交通隔絶せる困窮せる一般村民の愁眉を開き、併せて土工賃金を与ふへきものと信す。

(6)花園村の惨状斯の如きに対しても予は尚村民の自力更生が絶対に必要なるを説き、徒らに国又は県の援助を空頼みすることなきやう強調したり。第十七

ている。

表1に戻ると、河井の視察は戦後の混乱が落ち着くまでの間は回数的には決して多くない。22年は一度もなく、23年～25年は年1、2回程度である。この時期も地元の静岡県内の視察は折に触れ行っているが、長期の視察は物理的に難しく、実のところ行きたくても行けなかったものと思われる。そうした反動からか、世の中が落ち着きをみせた昭和26年以降は、激増している。さらに同年のルース台風以降は、通常の砂防視察に加え、災害被害地への視察も行うようになった。

5 南紀豪雨をめぐる記録

「河井日記」の視察記事は、手帳しかない時期を除いていずれも詳細である。そのなかで、今回は昭和28年7月の南紀豪雨をめぐる記事について、被害の大きかった有田川上流の花園村の視察を中心にみてみたい。

南紀豪雨は「7・18水害」「紀州大水害」とも呼ばれ、和歌山県編刊『和歌山県災害史』（1963年）、近畿地区大学連合水害科学調査団編『和歌山県水害報告書』（日本教職員組合近畿地区協議会大学部、1953年）、『7・18水害写真集（主として有田川上流流域）』（和歌山県土木部砂防課、1992年）、藤田崇・諏訪浩編『昭和二八年有田川水害』（古今書院、2006年）などに詳しく記されている。それらによると、昭和28年7月17～18日に和歌山県北部を襲った梅雨前線による豪雨は有田川・貴志川をはじめとした河川を急激に増水させ、各所で洪水や山崩れが発生した。さらに流出した土砂によって各所に天然ダムが形成された。山崩れは大規模なものが10カ所、中規模のものが50カ所、山肌がはげた程度の小規模なものまで含めると数百カ所に達したという。花園村周辺の総雨量は900ミリ、局所的には1000ミリを達したと推察され、村内各所で大規模な山崩れが発生し、北寺地区は集落全体が壊滅した。また村内の金剛寺と北谷には天然ダムが形成され、前者は9月25日の豪雨に伴い決壊し下流に被害を出している。

河井が有田川上流部の視察に訪れたのは10月17日である。この日、彼らは高野山側からオート三輪に分乗し、



昭和28年、南紀豪雨災害地視察

臨時国会の開会には近くに在り、国としての施策は補正ヨサン案に依りて実施せらるるも、到底村民の所期に副ひ能はざるを恐れたるを以てなり。而して挙村一致、諧和協調、自己の災害は自らの手に依りて復旧するを精神とせよと勧告し、造林、砂防、道

路改築、学校修理等より麦播、甘藷作、山葵田復旧など苟くも遺漏なきを期せんことを切望したり。

河井が災害地の惨状に強い衝撃を受け、被災者に対し深い同情を覚えたことは、日記の欄外に記された二首の歌にあきらかである。

山はさけ川は怒りて村は埋つみ住む人もなく荒れ果てにけり

慰めむ言の葉もなし田を畑を親を失せたる村の人々

6 再度の視察

河井は翌29年8月にも再び南紀豪雨の被害地を視察している。前年の花園村の視察が必ずしも充分とはいえなかっただけに、8月10日の視察は入念である。

八時出発、小型乗合自動車にて辻の茶屋に到る。其間荒廃せる林地、補修中の県道を見る。暑気強きも天空一点の雲なく、大に展望を擅にすることを得たり。辻の茶屋より余は予て用意せられたる駕籠に乗る。最高の優遇にして謝するに辞なし。十時半花園村金剛寺なる二大崩壊地なる天然ダムを視察し、十一時半宇新子なる竹屋旅館に入り弁当を食ふ。村民有志多数来集して深甚なる謝意を表せらる。食後出発、北寺部落東端にて、災禍を免れたる帝釈堂に罹災者九十七名の霊を弔ひ、当時の状況を聴く。それより北寺部落役場及十八戸全滅せる跡を弔ふ。花園川右岸の大崩壊は一瞬にして村中心部落を埋却したり。廃墟には滅失せし家の名を掲げたる小板を立つ。死者多数なりしも遺骸の掘せられしもの少く、昨秋までは異臭顕然たる箇所ありしと云ふ。それより右岸に高野谷、北谷の荒廃を過ぎ、三時村界梁瀬なる農協事務所に達す。此所にて花園村長斉藤氏（病を冒して特に高野町より来れり）、安諦村長久保田伊右衛門氏、有田地方事務所長阪上義和氏より感謝及陳情を聴く。八幡村長は二沢洋一氏、村役場にて説

明すとして時間をsaveせらる。四時出発、一同は下流地方より入来れる県庁土木部のjeepに分乗す（駕籠に謝す）。阪上事務所長の案内にて安諦村横谷の荒廃を見る。所長は山林砂防の実施を強調せり。八幡村に至るの間道路（県道）辛うして開通す。未成の箇所は川原を進めり。所在車を駐めて荒廃状況を見、又対策を論議す。六時八幡村清水部落なる八幡村役場に達す。村長二沢洋一氏より復興に関する熱心なる説明を聴き、了て之に應對し自立精神の發揮を要望す。七時前旅館清心館に投ず。本日の行程約十里、其間五里は徒歩す。炎暑燬くか如く命懸けの強行軍なり。赤木氏と平越議長とは健脚を競ひ他の追従を許さず。然るに予は駕籠に乗るを得たり。

日記は、このほか山崩れの原因について、地質や植栽と降雨量の関係を分析するなど興味深い記述が少なくなく、さらに引き続き行われた和歌山県内の日高川・貴志川流域や、木津川方面の視察状況に関する記事も貴重である。例えば高野山では「大阪営林署の皆伐せる高野山の国有林は皆伐のまゝ之を寺有に移し、若くは部分林を設定しあり、谿間に砂防堰堤を築造せるを見るも、昨年の如き大雨を見すと雖も下流（貴志川を主とす）地方に及ぼす災害は避くへからざるものあらんと信せらる」と無計画な国有林の乱伐を批判し、一方、有田川上流の花園・安諦・八幡三村に対しては「表土は概ね深し故を以て杉の植栽に適し、到处美林鬱蒼」たるも、「地質大体に於て同しく、風化せる中世紀層に石灰岩、安山岩を交へ加ふるに粘土を以てし、地盤甚脆弱にして水を含むの量多く、岩石面の傾斜に従て崩壊するの危険甚大なり」として、「三村は植栽林多く三十五、六年生の杉林其主位を占む。蓋し大正十年前後に杉（檜）の植栽行亘れるか如し。花園村には五六十年林ありと雖も、昨年の如き降雨に対しては表面の保護竟に不可能なりしか如し」と、脆弱な地盤ではいかに保全が行き届いていたとしても、自然の猛威の前には歯が立たないと認めている。淡々とした筆致なだけに、無念さが一層胸に迫る。

7 おわりに

以上は「河井日記」の龐大な次述のごく一部に過ぎない。今後日記の公刊が進めば、さまざまな方面から内容分析が進むことになる。災害研究は従来、自然科学分野の研究者を中心に推進されたこともあり、歴史史料の発掘は必ずしも盛んであったわけではない。今回の「河井日記」の分析が、こうした分野において多少とも寄与することができれば幸いである。

付記：本稿はJSPS科研費25370790の助成を受けたものである。

(2014.4.7 受付)